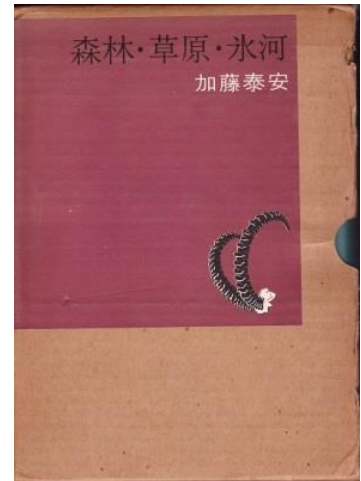


加藤泰安著 『森林・草原・氷河』

未だ「探検」や「遠征」という言葉が生き生きと輝いていた古き良き時代に、京大の遠征隊でならした著者の山行記、探検記である。いくら良き時代であったとは言え、長期にわたる遠征にしょっちゅう出かけていては、仕事も続けられないであろうに、著者は遠征から帰る度に新しい社長業が待っていたという誠に羨ましい幸運児であり、井上靖の「あした来る人」のモデルでもあった。ネアカでセレブの出自でもあったせいであろうか、文章も肩肘張ったところがなく、ほのぼのとしていて寝転んで読め、しかもウィットとユーモアに満ちている。40年以上も前に出版されたものとは思えない。



内蒙古の探検から始まって、チョゴリザ北東峰やサルトロ・カンリの初登頂などカラコルムの山行記に紙幅の大半がついやされていて、往時の海外遠征の様子が髣髴としてくる。「ゴサガ」というペニス・ケースだけを身に着けたニューギニア中央高地のダニ族やウニ族が世に初めて紹介され、世間を驚かせたニューギニア秘境の探検記も収録されている。確か本多勝一が朝日新聞に書いた記事とゴサガの写真をご記憶の方も多いのではなかろうか。その頃は私は大学生であったが、「ゴサガ」と「アマカネ」（こんにちは、有難う）という現地の言葉が学生の間で大流行したことを覚えている。

本の内容は海外の山行記や紀行文が主であるが、「登山界よ、どこへ行く」、「登山のために」、「登山指導者の責任」など、今読んでもナルホドと唸らせる論考もあり、著者の登山哲学への炯眼はその辺の所謂登山家の比ではない。多くの真摯な探検と登山に裏打ちされた知性と天性の気品とがなせるワザであろう。

私事で恐縮であるが、この本を最初買ったのは会社に入りたての頃で、給料の1割以上も叩いて買ったような記憶がある。お陰で給料日前になると口を糊するのにも困り、一晚の晩飯代のために古本屋に質入れを繰り返した挙句、いつの間にか流れてしまった。当時は古本屋にも質屋の機能があって、所定期日までに元利を差し出せば、取り戻せたのである。先日、新橋駅前の蒸気機関車広場の古本市で、たまたまこの本を見つけて買い戻した。定年退職時の給料の0.2%であった。

新本は無いが、古本なら今でもアマゾンで購入できるので、ご一読をオススメしたい。

茗溪堂 1956 刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)